

競売と「建物明渡(引渡)し執行事件」の公示書

会社が倒産した社長が、今日の午後に裁判所から執行官が来るので側にいて欲しいと連絡があった。30分前に家に行き社長と待機していた。2週間ほど前に裁判所から送達されてきた「催告書」を見せられ目を通していった。

「催告書」の内容は…
『(事件番号)平成●●年(執口)●●●号
債権者(申立人)●●●●から、あなたが占有する本件建物について明渡(引渡)の申立があったので、来る●月●日までに全ての動産類を搬出し本件より任意に退去するよう催告します。上記期日までに任意に退去しないときは、●月●日●分に本件建物の明渡(引渡)しの強制執行を実施することを告知します。任意退去する場合、搬出する動産類(家財道具)に差押物件がある場合ときは、その搬出移動については前もって当職に連絡の上、許可を受けて下さい。強制執行の期日には、全戸不在の場合でも解錠して実施しますが、この場合建物内にある動産類は、遺留品として処理し、法律の規定により、あなたが、建物内にあるこれらの遺留品を速やかに引き取らないときは次の通り処分することになります。□強制執行の日時にその場で売却処分する場合があります。特に貴重品、身のまわり品は、必ず、期日前に持ち出して下さい。遺留品を保管した場合の保管費用は、あなたの負担となります。』と書いてある。

裁判所の執行官は、明け渡しに関係する10名ほどの人を伴ってきた。家の中を各部屋毎に隅々まで見て回り、家財道具などの数量や搬出する場合の搬出手順などを書類に書き写している。執行日当日のトラック台数や作業員数と段取りを確認するためだ。

社長と家族に対して、「催告書」と「公示書」の文章を全文朗読し、更に添付されている書面は「注意書」とあり、債権者に替わって他の居住者がいても強制執行は行われる…、明け渡しを猶予されている期限は、執行日の前日である…などが記述されていることを確認させられる。

最後に、「公示書」の控えに署名するように要求する。決して荒い言葉ではなく淡々と説明するのだが、その言葉の一つ一つには重い響きがあった。

しばらく書面をみていた社長はおもむろにペンを取って署名を始めた。手が震えている。高齢のせいではないと思う。書類をしっかりと押さえ、呼吸を整え…書き始めたが筆圧の加減が変だ。書類に穴が空きシワシヤになる。かなり動揺している…興奮状態だ。

永い永い時間に感じられた。執行官は玄関に入ってすぐに見える位置に、汚れないようにビニール袋に入れて張ってから帰っていった。

再起するには...お金で得た物は一旦捨てて身軽になろう

そもそもこの「明渡し強制執行事件」は、2ヶ月ほど前に債権者が訪ねてきたことに始まる。つまり、社長の自宅が競売になっていたものを落札した人が債権者だ。競売で落札したので速やかに明け渡しを欲しい

リスク・カウンセラー奮闘記

と落札人が訪ねてきたのだ。

社長は、永年住み慣れた自宅を立ち退くのは断腸の思いなのだ。何とか買い戻しができないものか…というのが社長の最後の望みなのだ。ただ、今、自分には現金がない。親戚の誰かに新規に登記した会社の代表取締役をお願いし、その会社に対して金融機関から融資をしてもらった資金で買い戻したいというのだ。確かに不動産の半分からは賃貸収入があったが、半分は自宅になっているので収益を見込めるような状況ではない。

数億円もの借入れをしたところで、返済の為の確固たる収入がないのに融資をする金融機関はないのに…。競落人に買い戻しを希望していることを打診したが、買い戻しに必ずしも応ずる考えは一切ないという回答があったそうだ。

強制執行の期限まであと30日しかない。ぐずぐずしては行かない。家族全員に集まってもらうこととなった。永年住んでいた家に、執行官や20人ぐらゐの執行補佐人がぞろぞろと出入りして家財道具が持ち出されていく状況だけは回避したいというのが全員の気持ちだ。

債権者から幾ばくかの明け渡し費用をもらって、期日前までに任意で引越ができるように交渉して欲しいというのだ。移転先の契約金、家財道具などの引越費用、粗大ゴミの処分費用、燃えないゴミの処分費用など…、明け渡しに必要な費用をいくらまで出して貰えるだろうか。移転後にかかる雑経費も必要になる。交渉の条件はほぼこちらの要求が受け入れられることとなった。

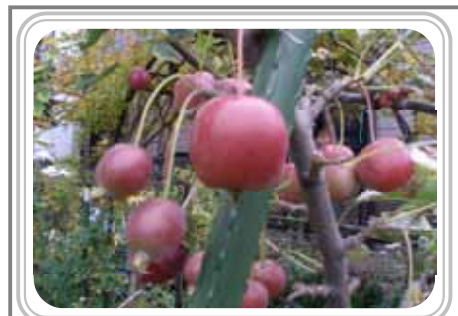
それでも社長は家を出て行くことを行動に移せないでいる。山のようにある家財道具のうち三分の二を粗大ゴミに出しても移転先には収まらないほどだ。外部からも数

人の応援に来てもらって10日間をかけてやっと片付けの目処が立った。

片付けを手伝いながら思い出す。自分の会社を清算する決断ができたとき、同じ法人会で親しくしてた友人が「お金で買った物は一旦全部処分して身軽になった方がよいよ…!物に拘っていると却ってこれからの行動に不都合が生じるよ…」と言ってくれた言葉が気になる。工場の他に7階建てのビルを1棟借りていたから、捨てる備品が多かったこと…。自分の場合は、十数冊の書籍だけを手元に残して一切を処分してしまった。それを必要とする人に全てを貰っていただけですっきりした。あの時の友人の言葉に…今は大変感謝している。



近くの公園の一角にクヌギの林がある。夜、風が強かった翌朝は小さな帽子が取れてしまったドングリがいっぱい落ちています。



散歩コースで見つけた庭先の姫リンゴ。観賞用ではあるが...どんな味がするのか気になって仕方がない。